東西文明の比較(18)

陽光新聞社・顧問　塩澤宏宣

前回に続いてアメリカ大陸の文明について述べてみたいと思います。

今では世界の食卓を飾る食料の原産地がアンデス産だということをご存じでしょうか？

トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、インゲンマメ、トウガラシ、ピーナッツなどです。

それらの野菜を食べながら、遠い日の出来事を想うことも一興ではないでしょうか。

アンデス文明の特異性

コスタ（海岸域）から内陸部に入ると、山岳地帯のシエラになります。そこはアンデス山脈の東山系、西山系、中央山系の三地域に分けられます。これらの地域は標高差で気候風土が異なります。まず沿海部に近い標高500メートル付近でユンガと呼ばれる谷間が出現します。これらの谷の両側は急斜面の乾燥地帯ですが、谷底では耕作が可能です。バカイ[1]、グアバ、チェリモヤ[2]、アボカド等の果樹の他に、サツマイモ、マニオク[3]、トウガラシ、コカ等も栽培されます。

標高2300メートル以上になると、年間降水量は250～500ミリに増え、平均気温は11～15度と低くなります。この一帯はケチュアと呼ばれます。現在ではペルーの大都市が点在しています。農作物は最も重要なトウモロコシと豆類が盛んです。標高3500～4000メートルになると、年間降水量は800ミリ、平均気温は1～7度と寒冷地です。高地性の根菜類やオユコ（ツルムラサキ科）、オカ（カタバミ科）などが栽培されます。

シェラを越えてアンデスの東斜面に出ると、その眼下にはアマゾン川源流のモンターニャが広がります。こうした自然環境にある中央アンデス地帯では、紀元前2500年頃から農業と牧畜が本格的になります。この時期を以てアンデス文明の「形成期」といいます。

文明の「形成期」は、一般的に下記のような定義をしてきました。

①農耕による定住

②祭祀建造物の出現

③土器の出現・・・の三要素をもって「形成期」としてきましたが、アンデスの場合は、それが該当しません。注目すべきは、農耕定住と祭祀建造物の出現がほぼ同時期に起っています。これがユーラシア大陸の諸文明と異なる事象です。

カラル遺跡

ペルーの首都リマの北約200キロ、中央海岸のスーペ谷にある巨大遺跡。前2600～2000年に存在しました。多くの祭祀用建造物が集中している区域は約60ヘクタールあり、1万5000人ほどが暮らしていたと言われています。ナポリ近郊のポンペイの城壁内の広さに匹敵します。代表的な建造物は、円形神殿と階段ピラミッドです。これ以外にも8基のピラミッドや円形神殿があります。前1800年以降に製造された土器や武器は出土していません。この時代には戦争や武力闘争などがなく、そのエネルギーはすべて祭祀施設の建設に費やされ

カラル遺跡

ていたようです。

農業は高地から海岸へ

アンデス原産の野菜や果物は豊富です。トウモロコシ・ジャガイモ・サツマイモ・インゲンマメ・トウガラシ・ピーナッツが古くから栽培されていました。これらの植物は、湿潤から先に栽培が始まり、後に乾燥した海岸地帯に広がりました。トウモロコシは、高原では前5600年に出現していますが、海岸地帯では前1800年になって現れました。インゲンマメに至っては、高地で前8600 ～ 8000年に現れましたが、海岸地帯では前2500 ～ 1800年です。

コトシュ遺跡

コトシュ遺跡の「神殿更新」

東京大学古代アンデス文明調査団によって1960年代から調査された遺跡です。注目されるのは、9メートル四方の正方形の公共建造物が見つかったこと。壁は石を芯にした泥壁で、表面には上質の上塗りが施されています。壁の内側には大小の壁龕（がん）があり、床の中央は一段低くなって、その中央に炉が切られています。さらに壁龕のある壁には手を組んだ姿のレリーフが2体見つかっていることから、この建造物は祭祀用の建物であることが判明。

クントゥル・ワシ遺跡

この一帯からは土器類が出土していないことから、前2500年（先土器時代）に建造されたと言えます。

更に興味深いことは、一つの建造物全部または一部を壊した上でそれを封印するかのように内部を大量の礫と土で埋め、その上に新たにほぼ同じ構造の建物を造っていることです。それも一定期間ごとに建物を建て直す「神殿更新」が行われています。

文明を語るとき、ユーラシア大陸の場合は、まず農耕定住が始まり土器の製造が起き、やがて余剰農産物が生まれると宗教施設が出現します。ところがアンデスでは、余剰農産物の明確な備蓄施設も充分に見当たらず、土器すらなかった時代に、すでに宗教施設が生まれているのです。これは、従来の文明展開と真っ向から対立する展開です。

クントゥル・ワシ遺跡の1000年祭祀

この遺跡は、ペルー北部のアンデス山脈西斜面、標高2300メートルの山中にあります。四方を加工した巨石を積み上げた壁で囲まれています。平坦な頂上部は、幅100メートル、奥行き140メートルの基壇。そこに前1000年前後から石造建築の神殿が何度も建設され、約1000年半にわたって祭祀活動が営まれていました。その間4回の「神殿更新」が行われています。中央基壇の下からは墓が発見されており、黄金製の冠や鼻飾り・耳飾り等の装身具が

出土しました。

マヤ族に伝わるトウモロコシの神の像

最終氷河期が終わってから１万年前のある時期に、“一連の新しい食べ物が一連の新しい神々と共に出現”しました。中東では麦、中国ではキビと米、パプアニューギニアではタロ芋、アフリカではモロコシでした。そしてどこでも神々に関する物語が生まれました。死の神と再生の神、季節を巡らせ豊作をもたらす神々。そして信者たちが食べていた食品を象徴する神々。トウモロコシの神は、中米から来た食べ物の神です。

マヤ族は、トウモロコシから生まれ、その練り粉で作られたと信じられていました。古代メソアメリカの人々にとって、トウモロコシは儀式や礼拝時に拝む対象となっており、これはマヤ族より以前のオルメカ文明にまで遡ります。

この神は、種をまき、収穫し、再び種をまくという農業周期の現実と、それに沿うように人間が生まれて死に、また生まれ変わるという周期への信仰の双方を表しています。しかし、それ以上に、この神は中米の人々の肉体を作る素材そのものだったのです。

私感ですが……

文明の発展を考えるとき、「地域の交流」は欠かせないと考えてきました。しかし、アメリカ大陸の諸文明は、その「交流」がないまま、独自の発展を続けました。それらの文明から学ぶことが幾つかあります。そのひとつに「天文」があります。「天文」は、宗教やピラミッドのような巨大な建造物の「核」になっていました。このことは、長い間争いをしなかった事と関係がありそうです。

もうひとつは、「鉄の製法」を知らなかったことと、「紙」と「文字」を持たなかったことでしょう。日本の歴史と比べると、縄文時代草創期から江戸時代初期までの長きにわたって、外部と「交流」を持たずに独自の文化を築いた「アメリカ文明」が、16世紀になり、あっという間に西欧諸国によって破壊されてしまいました。

蛇足ながら、追記すれば、「古代アメリカ文明」についての研究が“薄い”のは、西欧諸国の侵略が明らかになることにためらいがあるのではないか、ということです。今更ながら文明の発展には、他の地域との「交流」が重要であることを感じます。

（挿入写真はすべてGoogleパノラミオより）

■注

1) バカイ：栃の一種。
2) チェリモヤ：原産地は南アメリカのペルーやエクアドル。「森のアイスクリーム」とも呼ばれ世界３大美果木の一つ。（ウィキペディアより）
3) マニオク：和名：キャッサバ。芋の澱粉がタピオカ粉

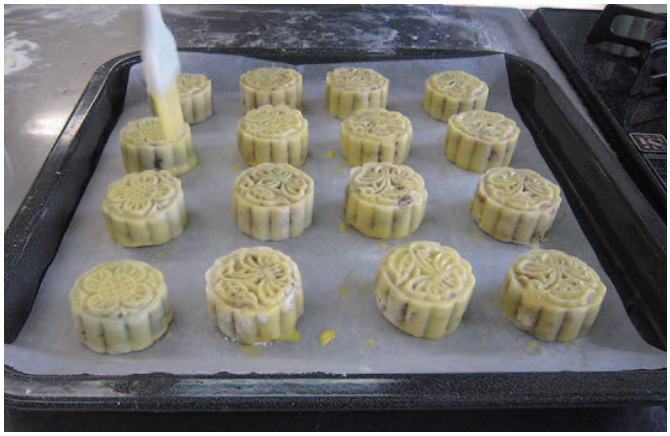
今ではすっかり‘わんりぃ’の秋の定番料理講座になっている‘手作り月餅の会’だが、この月餅講習会が‘わんりぃ’の講座に登場したのはいつだったのか、ふと気になって‘わんりぃ’ ホームページで、活動履歴を調べてみたら2009年９月だった。 ということは、その前年の2008年秋、山西省の旅の途中の村で村人たちが集まって月餅作りをしているのを目撃、ご馳走に預かったのだ。

「え、月餅って手作りできるんですかぁ!?」と目から鱗だったが、 その折、月餅の木型を頂いたので、当時‘わんりぃ’会報に「媛媛講故事」のタイトルで中国の物語を紹介くださっていた山西省太原市出身の何媛媛さんに月餅作りをお願いした。何さ

餡を丸めて型に詰め成型・有為楠講師の実演

餡を詰めて焼くばかりに成型された月餅　写真の中の特大のものは、プラスチック製のゼリー型で、月餅の型がない場合の一例として成型に使用したもの。型から抜くとその左隣の花形のようになる。

真剣な表情で餡の重さを量る参加者



成型して並べられた月餅は、刷毛で卵汁が塗られる

型に入れて成型する前に、まず餡を皮で包んで団子を作る

焼き上がり（1 人分のお土産）